

けて、人生は抜苦与楽である教えを証明されることである。捨は、目標を達するために、他のものに目をくれずコツコツとやり続けることをいふ。

それでは、禅定によって、四無量心を得るといふならば、釈尊は禅定のことをどう考えていたのであろうか。

稲津紀三 インド哲学史P182
定と訳されている原語には samadhi (三摩地) 三昧、等持と dhyana (禅那) の二つがある。三昧は「平等に保つ」精神の統一作用を意味し、禅定はその三昧力に基づいて、一心に瞑想する行を意味する。

釈尊は、三昧心の方向に歩まれた。道を志す願いが深くなれば自然に考え深くなり、熟慮しなければならぬ問題というものが出てくる。

釈尊の出家の熟慮とはなんであろうか。

1、生老病死について

生 jati 生きることはなく、生まれること、誕生。自己の生まれたことが感謝される。

受け難き人身を受け

老 jara 自然と涅槃に近づいている。老いと仏の慈愛とは一枚になっている。

病 vyadhi 病は苦悩の根を抜くことを本願として顕われた仏の心光に照護されるよりは

ほかはない。

死 marana 仏陀の心は永遠の救いを用意して、超え難い死畏の関所をみちびいてくれる。(捨命住寿・大樂涅槃經)

稲津紀三著・インド哲学史P161

生老病死について、仏陀は、涅槃 nirvana であらわしている。それは吹き消す nir-va という動詞から変化していて、「吹き消すこと」「吹き消された状態」を意味

して、われわれの苦悩の心火が寂滅して、智慧と慈悲にみちあふれた法身の顕われることをさしている。苦悩の寂滅するという方面から仏陀は、これを滅 nirodha とも名付け、人間の体験することのできる最も聖い真実(聖諦)とされた。

それでも人々の苦があると思つのはなぜであろうか。

苦なるものに原因があり、苦を招く人間の過誤(原因)があるのである。人間の苦のもととして煩悩を考慮した。

随煩惱(Upaklesa) (心の表面に波立ってくる種々なる情念を随煩惱 anuklesa) 煩悩身をわずら

わし、悩は心をなやまずと根本煩悩(煩悩のうちで根本なり、他の煩悩が起こるもととなる。貪、瞋、痴、慢、疑、悪見)

釈尊はこの煩悩は苦悩として憎むべきもの、避くべきものではなく、抜苦与楽をしらしめる道(諦)「聖い真実」であることを示されたのである。四聖諦の教えである。諦 = satya 真理とか真実である。

四聖諦には

苦聖諦 苦は無知や煩悩や悪業の累積された結果おきる(苦のもと)

集聖諦 苦の過誤の累積が集まった

滅聖諦 苦の原因がわかったら対応して解決にむかう

道聖諦 一度と煩悩にとらわれない真実の道を歩む

世間の煩悩は、四聖諦の教えがあることがわからなくて、生老病死を縁として目覚める一歩前の無明 avidya の状態であるのだろう。

無明の本質は、vidya(明) 明の中心は

vidya 知る。vidya は「知らるべき」「知らるべきもの」の認識であり、wisdom、叡智の語源である。

釈尊は「私に、この四聖諦において、三

転十二相に如実智見が明らかになったときに無上等正覚が覚証した」と語った。(曾我部正幸編・仏教要語集)

迦旃延経(釈尊が舍衛国で述べた中を以て法を説く)では、無明を縁として諸行あり、諸行を縁として識あり、乃至、このようにしてこの唯苦なる蘊身の集起があり、しかしながら、無明の余りなき離染の消滅により、諸行の滅あり、諸行の滅より識の滅あり、乃至このようにして、この唯苦なる蘊身の滅はおこる。十二縁起では迦旃延経で乃至と省略されているが、十二支に分析して示す。

無明 諸行 識 名色 六処 (六入) 触 受 愛(渴愛)

取 有 生 老死・憂悲・苦惱愁

(曾我部正幸・続仏教要語集P75)

この十二縁起は、物事はすべて因縁で

なりたち、自分が行ったことはすべて結果で出てくることを教示したものである。

因縁果である。この教えには過去の

ことよりも現在の行っている願いを強く持つて立ち向かっていくことの大切さを教示しているのである。

この時、縁起の識の滅の心が釈尊の出家の原因の一つであったのではないだろうか。

識の原語 vijana 一切の事物をそれぞれ

の相において判別し覚知する心の作用を

識と名付け、覚知されている一切を、境

または境界(対象、対象界、artha, vishva)と

いふ。なにをしたらいन्दが繁栄する相

を考えたのであろう。

一切の事物をそれぞれの相とは、インドでは平和でなかったからと思念する。紀元前600年ごろよりインドの国情が変化

して、王族が指導者となって第三期の新しい歴史を創造する機運になった。初期

の頃のインド全土はまだ統一国家の形態に

ならないで、種族単位の大小の王国が形

成され、世襲の王家が君臨して、都城を

築いて都市文明を興し、自族の繁栄を図

つて互いに覇を争っていた。

釈尊は、争い事が起こらない方法として熟慮したことが、後世に次の教えとして受け継がれている。

1. 話し合いで解決すべきである(篤敬三宝・憲法十七条)

2. 武器を持って戦うべきでない。平和

の国(くくり(勝鬘經義疏)

3. 恨み(apanaha)をもつてではなく、報

をもつて尽くすことである(法句經)

4. 七不衰退説(国が滅亡しない方法、聖求經)

5. マウリヤ朝アシヨカ王(アシヨカ王碑文)

6. 民を救っていくことが大切(三國誌)

1-6 があげられている。後年、それぞれの国々で教えが相と成り受け継がれていった。

釈尊の出家の動機として、

ア) インドの平和への願い、戦いをす

きでない

イ) 無上等正覚と四聖諦を述べ伝え、広

める。無上の安穩(ニルヴァーナ) 涅槃である。

ウ) 願以此功德 平等施一切 同発菩提

心 往生安樂國

釈尊は、 alara kalama じ uddaka